新任薬剤師研修を終えて

埼玉病院　薬剤部　花井　茜

出身大学：帝京平成大学（平成30年）
興味のある分野：がん領域、循環器領域

平成30年４月より埼玉病院に採用されました、花井 茜と申します。

入職してからは、先輩方から丁寧なご指導をいただきまして、調剤室と注射室での調剤、持参薬の鑑別、抗がん剤の調製といった業務に携わらせていただきました。８月上旬から病棟業務が始まり、薬の知識だけでなく、疾患とその治療全体の知識が不足していることを改めて痛感しております。埼玉病院では、大学５年次に実習生としてお世話になったことがあり、私が学生当時、輝いて見えた薬剤師の方々とともに働けることに嬉しく思います。当院では、現在も実務実習を行っており、今の実習生をみて懐かしく感じる一方、私も薬剤師として見られていることに、より一層身が引き締まる思いです。

さて、参加させていただいた７月７日の第22回新任薬剤師研修会では、国立がん研究センター中央病院の関口 昌利先生による「医療安全とは～転ばぬ先の杖～」のご講演と、「Team STEPPS」のグループ研修がありました。

「医療安全とは～転ばぬ先の杖～」のご講演で一番印象に残ったのは、効果的なダブルチェックについてです。受講前、ダブルチェックというものは２人以上がチェックを行えば、確実にエラーの確率が下がると考えておりました。しかし、信頼できる先輩とペアを組むとダブルチェックの精度が下がる、ということに衝撃を受けました。それは、「あの信頼している先輩が間違うはずがない」という思い込みが原因の１つであり、誰しもが思ってしまう危険性があります。ダブルチェックに効果をもたらすには、お互いがそれぞれ独立する、非依存的なダブルチェックを行う必要があることを学びました。

非依存的ダブルチェックの例の１つとして、１人目は処方せんから薬剤、２人目は薬剤から処方せんをみるといった、確認する方向を逆にする方法があげられていました。実際に、監査のときに薬剤から見てみると、始めに薬から視線を向けることで、薬の規格間違いや数量間違いを見落とす可能性を下げられるように感じました。また、自己監査を行う方法として、関口先生が実際に行っているのは、調剤は処方せんの上から行い、監査は処方せんの下から確認するとおっしゃっていました。そろそろ当直が始まり、自己監査をする機会が出てくるので、この方法をぜひ参考にさせていただこうと思います。

グループ研修の「Team STEPPS」では、「Team STEPPS」で提案されている４つの実践能力、①リーダーシップ、②状況モニター、③相互支援、④コミュニケーションについて学びました。グループ研修の内容で印象に残ったのは、バスケットボールのビデオです。始めは、「映像の中で白いTシャツを着た人たちがバスケットボールを何回パスしたかを数えてください」というものでした。白いTシャツの人々の動きに集中していると、

実はゆっくりとゴリラが横切っており、集中しすぎたためかゴリラを見落としていました。集中したときに、こんなにも視野が狭くなるのかと気づかされました。

研修会に参加して、薬剤師の医療安全について改めて考える機会ができ、有意義な時間を過ごすことができました。

最後になりますが、研修会を開催してくださった先生方、日頃お世話になっております埼玉病院の先生方にこの場をお借りして心より御礼申し上げます。